

再発見された旧松方コレクションの レオナルド・ビストルフィ作彫刻作品群について

第二回調査報告

高橋明也

まず、昨年度に筆者が行った調査報告^[1]後、懸案のレオナルド・ビストルフィの作品群が所有者のご家族によって国立西洋美術館に寄贈された事実を記したい。それらは2001年7月から8月にかけて、移動、梱包、輸送され、現在は当館の敷地内に設けられた仮設収納スペースに梱包されたまま、将来の修復、展示を待っている。とりあえずは、作品にとってより良い状態が実現されたということになるだろうか。その際、新たに2点のブロンズ作品が加えられたため、完成作品として組み上げられた形を想定した今回の寄贈作品は計8点となった。

この画期的な寄贈が実現された後、筆者は、作品の実際が我が国ではほとんど知られておらず、入手可能な文献・写真資料も乏しいこの彫刻家に関する現地調査を北イタリアを中心に行った。調査期間は2002年2月25日-3月9日である。調査の場所は、カサーレ・モンフェラート、ミラノ、トリノ、ローマ、パリ(文献資料のみ)である。以下、この調査旅行で判明したことを簡単に報告する。

主な調査地および調査経過

1) カサーレ・モンフェラート

ビストルフィの生地であり、市立美術館には石膏原型を中心に収集・展示しているビストルフィ記念石膏室が開室^[2]。市立公園や市役所をはじめ街中には彼の作品が多く見られ、また公営墓地にも何点かの重要な作品がある。

調査日-2月27、28日

カサーレ・モンフェラート市立美術館(以下カサーレ市立美術館と略記)学芸員ジェルマナ・マッツァ氏と共に、2日に渡ってビストルフィ記念石膏室の展示作品および収蔵庫の作品を撮影。旧松方コレクションに係わる文献資料等を探索する時間的余裕は無く、次回に持ち越しとなった。また、《ウルバノ・ラタッツィ記念像》(1883-1887年)など、市内に建つ記念碑や、町外れにある公営墓地の《アンドレア・ニコラと家族のための墓碑》(1894年)、《湖上を歩くキリスト》(1896-1899年、当地のブロンズ作品は1934年に遺族から寄贈されたヴァージョン)などを調査。ほかに、公園内の《無名戦士のための記念碑》(1925-28年)を調査した。

—とりわけ、第一次世界大戦後に制作されたブロンズ作品に関して、戦時中の金属製品供出に伴うブロンズ合金の練度悪化などにより、かなりの鬆(す)が見受けられることを確認。これは西洋美術館収蔵の作品《アベグの墓碑：生と死》(原型制作1912-1913年)について、とくに目立つ特徴であった。

—また、石膏原型と大理石作品の表現の違いを確認。とりわけ、石膏原型

1 カサール・モンフェラート市内。ピストルフィのレリーフ作品と記念石膏室のポスター



2 カサール・モンフェラート市立美術館の中庭

3 ピストルフィ記念石膏室内部



5 《湖上を歩くキリスト》ブロンズ、カサール・モンフェラート公営墓地



6 《湖上を歩くキリスト》(部分)ー劣化したブロンズ

7 《無名戦士のための記念碑》ブロンズ、カサール・モンフェラート市立公園



8 同上部分(プリマヴェーラ)(部分)ー劣化したブロンズ

9 《ドゥリオ家のための墓碑:記憶によって癒される悲しみ》石膏原型、カサール市立美術館



10 《セガンティーニ記念碑:物質から解放たれた「美」》石膏原型ー第一モデル、カサール市立美術館



11 《セガンティーニ記念碑:物質から解放たれた「美」》石膏原型ー第二モデル、カサール市立美術館



12 《死の花嫁たち》石膏原型、カサール市立美術館



13 カサール市立美術館収蔵庫にて(ジェルマナ・マッツァ氏とアンドレア・ピストルフィ氏)



の《恋人たち》は、大きさ(100×120×200cm)もさることながら、石膏原型特有の迫りに満ちた彫塑的表現が直截に出た作品である。また、《ドゥリオ家のための墓碑：記憶によって癒される悲しみ》や《セガンティーニ記念碑：物質から解き放たれた「美」》などの石膏原型作品も、いずれも大理石作品にくらべてより直接的な彫刻家の手の跡が現れた精緻なものであった。

2) ミラノ

青年時代のピストルフィが、ブレラ美術アカデミーの学生として形成期を過ごした場所。この地でジョヴァンニ・セガンティーニやガエターノ・プレヴィアーティらと知り合い、いわゆる「スカピリャトゥーラ」^[3]の一員として、ボヘミアン風の生活を送った。市内にある壮大な記念墓地 Cimitero Monumentale には、墓碑として建立されたかなりの数の作品がある。

調査日-2月26日、3月2日

ミラノ記念墓地およびブレラ美術館、ミラノ市立近代美術館にて資料収集。

—著名な指揮者であり、ピストルフィの友人のひとりであったアルトゥーロ・トスカニーニの早逝した息子ジョルジョの追憶のために建てられた墓所(1909-1911年)は、単純化されたフォルムの美しい大理石浮き彫りを巡らせた見事な作品。他方、《エルミナ・カイラティ=フォクト夫人のための墓碑：夢》(1900年)は、ピストルフィの代表作であるばかりか、イタリアにおけるリバティー様式の頂点に立つ作品と見做されている。

3) トリノ

生涯の大部分を過ごした町。1878年以来、ミラノから移ったピストルフィは、この町で彫刻家オドアルド・タバッキ^[4]のアトリエに入り、やがて独立。トリノ市内にアトリエを構えて制作をしたが、晩年には郊外のラ・ロジアで過ごすことが多くなり、そこで没した。トリノ市立近代美術館に収蔵されているものもあるが、作品の多くは公営墓地で見ることができる。なかでも《ドゥリオ家のための墓碑：思い出によって癒される悲しみ》(1898年)、《ホフマン家のための墓碑：悲しみ、詩、愛》(1821-1925年)、《ヘス家のための墓碑》(1920-1925年)は著名である。現在もまだ、彫刻家の遺族であるお孫さんのアンドレアとワンダ・ピストルフィ夫妻がこの町に在住している。

調査日-3月1日

アンドレア・ピストルフィ夫妻の案内でトリノの公営墓地で各墓碑を調査。残されたピストルフィの習作作品、絵画、素描、関係資料等をご自宅で拝見し、さらに市立近代美術館の所蔵品を見る。

—《ドゥリオ家のための墓碑》は、カサーレ市立美術館の石膏原型、西洋美術館の大理石作品との比較が容易な作例として興味深く観察。もともとはトリノ近郊マドンナ・ディ・カンパーニャ Madonna di Campagna の墓地に建てら

14 《トスカニーニ家礼拝堂》大理石、ミラノ、記念墓地



14



15



16

15 《エルミナ・カイラティ・フォクト夫人のための墓碑：夢》石膏原型、カザーレ市立美術館

16 《ヘス家のための墓碑》大理石、トリノ、公営墓地

17 トリノ公営墓地入口付近



17



18

18 《ホフマン家のための墓碑：悲しみ、詩、愛》の部分（悲しみ）ブロンズ、トリノ、公営墓地

19 《ドゥリオ家のための墓碑：記憶によって癒される悲しみ》ブロンズ、トリノ、公営墓地



19

20 同上、左翼部分



20

21 同上、裏面



21

22 同上、レリーフ部分



22

23 同上、レリーフ部分（石膏原型）



23

24 同上、レリーフ部分（西洋美術館収蔵大理石作品）



24

25 アンドレアとワンダ・ピストルフィ夫妻（トリノの自宅にて）



25

れたこの墓碑は、繊維産業に従事する新興ブルジョワであった地元出身のジュゼッペ・ドゥリオ(?-1896)のためのものであった。第二次世界大戦で損傷を受け、1960年代になって現在の場所に移された。このブロンズ作品でまず眼を引くのは、材質を異にする他の2作例と違い、3面の浅浮き彫りを施した垂直の壁面に加えて、もう一面が向かって左側に90度の角度で立ち、全体としてL字型を成していることである。直交するその左側の壁面には、死者の肖像と天使たち、および献辞が彫られている^[5]。

大理石作品が完成されるまでのどの段階で、この壁面が省かれたのかは明らかではないが、おそらく旧松方作品が最初に発注されたときに、特定の死者の肖像は美術館展示にはふさわしくないと判断されたことは想像可能である。あるいはすでに、1898年のトリノ国民美術展に石膏原型が展示された際に、省かれていたこともあり得ないことではない。

他方、1900年頃に鑄造されたと思われるこのブロンズ作品の鑄造技法は、非常に入念であり、第一次世界大戦後に鑄造された作品とは明らかに異なっている。このころの鑄造所はトリノのフマガッリ Fondatore Fumagalli であるが、現在は消滅してしまったらしいこの鑄造所に関して、将来的に調査する必要があるだろう。

—ほかの墓碑についても、ブロンズ作品に関しては上記のような結論が導かれる。《ホフマン家のための墓碑》の寓意像部分にはやはり鬆が多く見られ、共通の特徴を見せている。

4) ローマ

ボルゲーゼ公園の国立近代美術館には、1915年、作者自身によって寄贈されたとされる《セガンティーニ記念碑：物質から解放された「美」》の大理石による第二ヴァージョンが収蔵されている。また、ヴェネツィア広場の「ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念碑」正面を飾る群像彫刻《犠牲》がある。

調査日-3月3、4日

2日に渡り、国立近代美術館専門官ジャンナ・ピアントーニ氏および資料室のステファニア・フレツォッティ氏と面談。《セガンティーニ記念碑》の写真撮影と関係資料収集。また、ヴェネツィア広場に赴き、モニュメントの彫刻《犠牲》を調査・撮影。

—ローマ国立近代美術館の《セガンティーニ記念碑》は台座を欠き、上部の寓意的な女性像のみである。美術館の作品台帳からも1915年にピストルフィ自身によって国に寄贈され、美術館に収められたことが確認された。他方、作品そのものに関しては、屋内展示されているため、状態は非常に良く、使用されたカラーラ大理石もほとんど無傷で、彫りも素晴らしい。

この大理石製《セガンティーニ記念碑》の第一ヴァージョンは、1906年に完成後、セガンティーニ美術館の開館に伴い、1908年にサン・モリッツに建てられたことが知られている(著者未見)。しかし、この第二ヴァージョンは、1907年ごろ作者自身が制作を決意し、ミラノ市に贈ろうとしたものと同一視されている

26 《セガンティーニ記念碑:物質から解放された「美」》大理石、ローマ国立近代美術館



26



27



28

27 同上、部分

28 同上、部分

29 ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念碑、ローマ、ヴェネツィア広場《犠牲》は騎馬像のすぐ右側傍らに立つ。



29



30

30 《犠牲》大理石、ローマ、ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念碑

が、どのような経緯でそれがローマに飾られるに至ったかの詳細は不明である。そして旧松方コレクションの大理石像に至っては一切の記録を欠いているようだ。仮に、この西洋美術館像を第三ヴァージョンとした場合、《セガンティーニ記念碑》には大理石による3体のヴァージョンが存在することになる。しかし、研究者サンドラ・ベレスフォードによれば、1922年12月にトリノのボンシニョーレ街にあったピストルフィの大理石制作アトリエで《セガンティーニ記念碑》を目撃し、ピストルフィ自身が「完成している」と言ったことを証言した、フェルッチョ・スティンキという著者のレポートが存在する^[6]。

ベレスフォード自身はこの記録から、第三のヴァージョンがあった可能性を示唆しているが、まさに今回寄贈された旧松方コレクションの作品がこの第三ヴァージョンであるのは間違いないと思われる。前回の調査報告書に記したコリエーレ・デラ・セーラ紙の記事^[7]に、松方が1918年の春にイタリアに赴き、セガンティーニ、ミケッティなどの作品とともにピストルフィの作品の買い付けを行ったことが書かれていたが、「…松方が購入した作品は梱包されたままジェノヴァ領事のもとに置かれ、戦争が終わるとすぐに東京に送り出された」(傍点筆者)という事実関係の幾分あいまいな一文を除いて、その記録ともはっきりと整合性が生ずる。すなわち、1918年に、ピストルフィの作品(おそらく石膏原型であろう)を実見した松方が、新たに大理石作品を注文し、やがて4年後にそれが仕上げられたのである。さらに、既述の1932年(昭和7年)の大阪朝日新聞の記事によれば^[8]、作品が日本に到着したのはほぼ「10年前」すなわち1922年頃であった訳であるから、この記録とも矛盾しない。以上のことから、西洋美術館所蔵大理石ヴァージョンの制作年代は、1918-22年と推定できるのである。

—次に、ヴェネツィア広場に赴き、モニュメント「イル・ヴィットリアーノ」を飾る作品《犠牲》を調査・撮影。モニュメント自体は、イタリア国王故ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世(1820-1878)年の業績を讃えて、1906年にベネデット・クローチ

エ、コッラード・リッチらとともにピストルフィも名を連ねた建設委員会が設けられ、1911年に除幕された。《犠牲》は、《政治》、《哲学》などを寓意するほかの7人の彫刻家の作品に伍して、モニュメントの基壇上に聳える。複数の人体を組み合わせ、中心となる死せる英雄の姿を、十字架から降下したキリストの姿に重ね合わせて「犠牲」のテーマを象徴的に表した構成は、マニエリスムやバロックのらせん状の動きを見せる群像彫刻や、ミケランジェロの《ピエタ》を想起させると評される^[9]。しかし同時に、ロダンやアントナン・メルシエなど、ロマン主義的テーマを壮大な構成で表す一連の19世紀の記念碑彫刻との関わりも見逃せないだろう。なお、この作品の石膏習作は、カサーレ市立美術館に収蔵されている。

以上、おもな調査地・調査作品とそれらの概要について、かいつまんで述べた。駆け足で行った今回の調査は、西洋美術館に寄贈された8点の作品に関する資料を収集するのが第一目的ではあったが、それとともに、歴史のなかで忘れられかけたレオナルド・ピストルフィというイタリア近代彫刻史上の重要作家の作品に、新たな光を当てる作業でもあった。いずれの作業も、まだ出発点に立ったばかりであり、松方コレクション作品が制作されるにあたって参照されただであろう完成作品のいくつかは、今回未だ見るに至っていない。ブロングインやベネディットを軸に展開した、松方コレクションの形成に係わる重要な1ページは、まだ開かれたばかりであると言ってよいだろう。

[1] 『国立西洋美術館紀要』No.5 pp.35-41

[2] Gipsoteca Leonardo Bistolfi. (2001年リニューアル開室)

[3] 1880年代前後から世紀末にかけて、後期ロマン主義的芸術思潮の中で生まれた芸術至上主義の作家たち。

[4] Odoardo Tabacchi (1831-1905).

[5] 献辞を以下に記す。“SOTTO QUESTO MONUMENTO/PERPETUO OLOCAUSTO DI FEDE E D'AMORE / DELLA MOGLIE E DEI FIGLI / LA SALMA VENERATA / DEL CAV. GIUSEPPE DURIO / GIACE CIRCONFUSA / DALLE SACRE MEMORIE / CHE LA CONSOLATRICE IDEA DEL POETA / HA EVOCATO / NEL NOME / DEL FERVIDO POETA DEL LAVORO / GIUSEPPE DURIO + 1896”

[6] F. Stinchi, *Elevazione. Dopo una Visita allo Studio di L.B.*, in “La Campagna della Valle” 30 dicembre 1922, S. Berresford, Catalogo della mostra, *Bistolfi: 1859 - 1933; il percorso di uno scultore simbolista*, Casale Monferrato, 1984, p.82に引用。

[7] 1923年9月15日付、第一回報告書p.36および註4参照。

[8] 昭和7年6月8日、第一回報告書 pp.36-37参照。

[9] S. Berresford, in *Op.Cit.*, p.110

参考資料1

国立西洋美術館所蔵となったピストルフィ作品リスト(S-は、所蔵番号)

S.2001-1

《セガンティーニ記念碑:物質から解放された[美]》

Monumento a Giovanni Segantini: La Bellezza liberata dalla Materia

原型制作1899-1906年頃

大理石

350×154×156cm(上部女性像部分:257×157×115cm)

S.2001-2

《ドゥリオ家のための墓碑:思い出によって癒される悲しみ》

Monumento Sepolcrale per la Famiglia Durio: Il Dolore confortato dalle Memorie

原型制作1898-1901年頃

大理石

245×509×130cm(中央前面の女性像:高さ180cm)

S.2001-3

《アベグの墓碑:生と死、または光に向かって、死の魅惑の虜となる生》

Monumento Funerario Abegg: La Vita e la Morte; Verso la Luce; la Vita trascinata dal Fascino della Morte

原型制作1912-13年頃

ブロンズ

215×355×250cm(死:高さ195cm、生:高さ170cm)

S.2001-4

《死の花嫁たち》

Le Spose della Morte

原型制作1894-97年頃

ブロンズ(浅浮き彫り)

271×100×69cm

S.2001-5

《アンヘロ・ヒオレロの墓碑:労働の英雄の埋葬》

Monumento Sepolcrale per Angelo Giorello: Il Funerale di un Eroe del Lavoro

大理石

78×40×60cm

S.2001-6

《恋人たち》

Gli Amanti

原型制作1883-84年頃

大理石

57×58×104cm

S.2001-7

《“生と死”のための習作》

Bozzetto per “la Vita e la Morte”

原型制作1912-13年頃

ブロンズ

40×60×46cm

S.2001-8

《ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念碑のための習作:犠牲》

Bozzetto per “il Sacrificio” del Monumento a Vittorio Emanuele II, Roma

原型制作1908-11年

ブロンズ

49×23×26.5cm

参考資料2

レオナルド・ピストルフィ略年譜

- 1859 北イタリア、カサーレ・モンフェラートに彫刻家の息子として生まれる。
- 1874 故郷の町からミラノのブレラ美術学校に学ぶための奨学金を得る。
- 1875 ブレラ美術学校に入学し、同僚のセガンティーニ(1858-99)、プレヴィアーティ(1852-1920)らと共に、“スカピリャトゥーラ”のグループのボヘミアンの生活に身を投ずる。
- 1878 トリノに移り、彫刻家オドアルド・タバッキのもとで彫刻を学びはじめる。
- 1880 初めての注文作品《ブライダ家のための墓碑:死の天使》を制作開始。
- 1881 トリノの美術振興協会の展覧会に女性の半身像《アルデンス・ラルヴァ(熱き亡霊)》を出品。1887生地カサーレ・モンフェラートに《ウルバーノ・ラタッツィ記念像》制作。
- 1883 画家アントニオ・フォンタネージの記念碑構想のために立像を制作(実現せず)。
- 1892 トリノのアカデミア・アルベルティーナの名誉会員となる。
- 1893 マリア・グスベルティとトリノで結婚。
- 1897 ヴェネツィアの国際美術展運営委員会のメンバーとなる。
- 1898 《思い出によって癒される悲しみ》(石膏原型)によってトリノ国民美術展で一等賞を獲得(ブロンズ鑄造は2年後)。
- 1900 《エルミナ・カイラティ=フォクト夫人のための墓碑:夢》完成(ミラノ、記念墓地)
- 1901 《思い出によって癒される悲しみ》をミュンヘンで展示。オーギュスト・ロダン、トリノのピストルフィのアトリエを訪れる。
- 1902 トリノ第一回国際装飾博覧会のためのポスターを制作。
- 1905 ヴェネツィア国際美術展において、ピストルフィの個展開催。サン・レモのジュゼッペ・ガリバルディ記念碑の制作を依頼される。

- 1906 イタリア政府から20チェンテージモ硬貨のデザインを受注。ミラノでセガンティーニのための記念碑《物質から解放たれた[美]》(大理石)を展覧。
- 1908 ボローニャ市評議会がピストルフィに、前年逝去したノーベル賞受賞の詩人ジョゼ・エ・カルドウッチの大規模な記念碑制作を依頼(1928年完成)。《セガンティーニ記念碑》、サン・モリッツで除幕。
- 1909 指揮者アルトゥーロ・トスカニーニ夫妻から、トスカニーニ家の廟墓の設計・制作を依頼される(1911年完成。ミラノ、記念墓地)。セガンティーニの生地アルコにブロンズによる画家の記念像を建立。
- 1911 ローマのヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念碑建設に際して、前面を飾る大型群像《犠牲》を完成。
- 1913 《アベグの墓碑：生と死》制作(大理石の完成作はチューリヒの墓地に建立)。翌年の第11回ヴェネツィア・ビエンナーレに石膏原型を出品。ウルグアイに《アンヘロ・ヒオレロのための墓碑：労働の英雄の死》建立(モンテビデオ、公営墓地)。
- 1915 《セガンティーニ記念碑》の大理石による第二ヴァージョンを国に寄贈。ローマ国立近代美術館に収蔵される。
- 1923 トリノ市より、無名戦士のための記念碑計画を委託(実現せず)。
- 1925 《ホフマン家のための墓碑：悲しみ、詩、愛》完成(トリノ、公営墓地)。
- 1928 カサーレ・モンフェラートの公園に《無名戦士のための記念碑》完成。サヴォーナに《ジュゼッペ・ガリバルディ騎馬像》完成。
- 1933 トリノ近郊ラ・ロジャアの別荘で死去。
- 1958 ピストルフィのアトリエに由来する作品群がカサーレ・モンフェラート市に寄贈される。
- 1984 カサーレ・モンフェラートにおいて回顧展開催。
- 2001 カサーレ・モンフェラート市立美術館のピストルフィ石膏室がリニューアル開館される。

(“Biografia” in *La Gipsoteca Leonardo Bistolfi, Catalogo delle Opere Esposte*, Citta di Casale Monferrato, 2001参照)

参考資料3

松方コレクションとピストルフィ作品関連略年譜

- 1896 松方幸次郎、川崎造船所初代社長に就任。
- 1914 第一次世界大戦勃発。
- 1916 3月、ストックポート売り込みのためアメリカ経由で第4回渡欧に出発。このころより美術品購入開始。画家フランク・ブラングインと親交を結ぶ。
- 1917-18 ロンドンを中心にヨーロッパ滞在。ヴェヴェル・コレクションの浮世絵を一括取得。このころブラングインに「共楽美術館 Sheer Pleasure Arts Pavilion」の設計を依頼。
イタリアでピストルフィ、セガンティーニなどの作品を購入。大戦終了直後の18年11月に帰国。
- 1919 航路の安全が確保され、コレクションが日本に到着しはじめる(計29回、275ケース、1124点余り)。
- 1921 4月海軍省の依頼を受け、Uボート凶面入手のため第5回渡欧に出発。滞欧中、パリ、ハンブルクなどで継続的に美術品購入。リュクサンブール美術館館長レオンス・ベネディットと親交。ジヴェルニーでモネに会う。ロダンの作品も多数購入。翌22年2月に帰国。
- 1922 ワシントン軍縮条約のため、「加賀」建造中止。造船不況始まる。
- 1923 関東大震災。2月23日付でコリエーレ・デラ・セーラ紙が、東京発の外電として、松方幸次郎が1918年にイタリアで買ったピストルフィやセガンティーニの作品が震災で破損した旨を報道。
- 1926 ジュネーヴの国際労働会議に出席のため、第6回渡欧。最後のまとまった作品収集を行った。
- 1927 金融恐慌発生。1000点以上の美術品が十五銀行へ融資のための担保として提供される。
- 1928 川崎造船社長を辞任。
- 1932 大阪朝日新聞神戸版(6月8日)に「ピストルフィの作品20点」の記事。
- 1939 第二次世界大戦勃発。ロンドンのパンテクニカン倉庫火災。預けてあった美術品多数焼失。
- 1940 パリにあった作品多数、元海軍駐在武官日置紅三郎の手で郊外のアボンダンに疎開。
- 1944 パリ所在の松方コレクションが敵性財産として差し押さえられる。
- 1951 サンフランシスコ講和条約によりフランスから寄贈・返還。
- 1959 国立西洋美術館開館
- 2001 国立西洋美術館にピストルフィ作品8点が寄贈される。

(越智裕二郎「松方コレクションについて」、展覧会カタログ「松方コレクション展—いま蘇る夢の美術館」、神戸市立博物館、1989年、pp.110-118参照)

A Rediscovered Group of Sculptures by Leonardo Bistolfi from the Former Matsukata Collection

Akiya TAKAHASHI

The NMWA currently houses a collection of sculpture which was formerly in the collection of Kōjirō Matsukata, featuring 53 works by Rodin and 6 works by Bourdelle. As is well known, the financial collapse around 1927 led to the dispersal of this famous Matsukata collection, either as surety for loans or through attachment by banks. In recent years, however, a number of these works have reappeared on the art market, both in and out of Japan. The majority of the works that have reappeared are either paintings or drawings, but we can tell from extant auction catalogues and actual works that Matsukata's collection originally included a wide variety of genres. It incorporated a spectrum of visual arts, from painting to sculpture, furniture and decorative arts, which he intended to display in a grand museum he planned to open in Tokyo under the name of the "Sheer Pleasure Arts Pavilion".

Last year the NMWA received an offer of a donation from a private collector in the Kansai region of a group of some ten plus sculptures, some dismantled, which Matsukata had collected in Italy. As a result of the survey of this collection by NMWA staff members, it was determined that they were by Leonardo Bistolfi (1859-1933), a sculptor active primarily in northern Italy. When reassembled, they constitute a group of eight sculptures, both large and small, made out of marble and bronze. The evidence for these works resides primarily in two newspaper articles. First, according to the *Corriere della Sera* (September 15, 1923 issue), through the efforts of his friend and advisor, the British painter Frank Brangwyn, Matsukata visited Italy in the spring of 1918 and there purchased Bistolfi sculptures along with works by Segantini and others. The works in question had been wrapped and set aside in Genoa through the remainder of World War I, and then were sent to Japan as soon as the war was over. The other article is from the Kobe edition of the *Osaka Asahi Shimbun* (June 8, 1932 issue). This article states that "a certain gentleman of Kobe planned to build a museum and display a group of 20 works by the major Italian sculptor Bistolfi. But instead of these plans, for some 10 years these sculptures have remained wrapped and gathering dust in Kobe Customs's Kawasaki Warehouse right before these works were to be auctioned as abandoned objects, unexpectedly a certain gentleman of Kobe expressed a desire to acquire them. The auction was canceled, and it was decided to hand the works over to the gentleman, so that at last, these world-renowned sculptures buried for ten years in a dark warehouse will finally see the light of day." While these reports are fragmentary, we know from these documents that in 1918 Matsukata purchased a large number of art works in Italy, and that they were shipped to Kobe around 1921-22. Matsukata, faced with the direct shock of the financial collapse of his own personal finances, handed over the Bistolfi sculptures to an art collector in Kobe, whose descendant donated them to the NMWA.

The sculptures in question can be confirmed as works that will stand as some of Bistolfi's major accomplishments, such as *Monumento a Giovanni Segantini: La Bellezza liberata dalla Materia* (original model ca. 1889-1906), *Monumento Sepolcrale per la Famiglia Durio: Il Dolore confortato dalle Memorie* (original model ca. 1898-1901), *Monumento Funerario Abegg: La Vita e la Morte* or *Verso la Luce: La Vita trascinata dal Fascino della Morte* (original model, 1912-13).

Bistolfi was born in the northern Italian town of Casale Monferrato and he studied at the Accademia di Brera in Milan, where he was classmates with Giovanni Segantini and Gaetano Previati. As a member of the “Scapigliatura” in the 1880s and 1890s, Bistolfi led a bohemian life-style. He then moved to Torino where he entered the studio of Odoardo Tabacchi, and Bistolfi made Torino the center of his later artistic activities. The majority of Bistolfi’s works are large-scale sculptures made either as funerary works or commemorative works. He began with heavily naturalist works in the first half of the 1880s, and from the 1890s through the first half of the first decade of the 20th century, his works displayed an elegant style made up of a mixture of Art Nouveau decorative styles and symbolist subject matter. From the 1920s through the 1930s, he was heavily influenced by Michelangelo and Rodin, creating a heroic style dubbed “Bistolfismo” as his fame grew.

With plans for the shipping and transfer of large-scale sculpture in place, the sculpture group was moved from Kobe to the NMWA during the summer of 2001, and they were left in their crates in a hastily prepared temporary holding spot. They are now waiting for their future conservation work and display. I conducted an on-site survey from February 25 to March 9, 2002, visiting the sculptor’s native northern Italy to study the Gipsoteca Leonardo Bistolfi attached to the Museo Civico di Casale Monferrato, and museums and archives in Milan, Torino, Rome and Paris. The goal of this survey was to gather materials directly related to the 8 donated works, to come into contact with as many works as possible by this important artist who has been forgotten in the history of modern Italian sculpture, as well as to gather materials related to the artist’s work in general. Thanks to the kind assistance of Ms. Germana Mazza of the Museo Civico di Casale Monferrato, the sculptor’s descendants, Mr. and Mrs. Andrea and Wanda Bistolfi in Torino, Ms. Gianna Piantoni and Ms. Stefania Frezzotti of the Museo Nazionale d’Arte Moderna in Rome, and numerous other individuals, I was able to acquire a large amount of written and basic photographic materials on the artist.

One great result of this survey was locating materials which clarified the questions surrounding the *Monumento a Giovanni Segantini*, a major work made of marble. Before the rediscovery of the Matsukata version, two works in marble based on two plaster modellos now in Casale have been known. The first of these works was a marble work unveiled in 1906, which today stands in the garden of the Segantini Museum in St. Moritz. The second version is located in the Museo Nazionale d’Arte Moderna in Rome. This work was presented by Bistolfi himself to the nation in 1915. There had been testimony that another, almost completed version was seen in the artist’s studio in 1922, and it was assumed that a third version existed. With the appearance of this work from the former Matsukata collection, it is now confirmed that there are three extant versions of the work in marble. Comparing the handling and finishing of actual works and the modellos, it is now safe to say that the NMWA work is one of the original works by the artist. A comparison of the dates and other facts in documentary sources also agree with almost no discrepancies. It seems almost completely certain that the 3rd version today in the NMWA was commissioned by Matsukata, and then completed by Bistolfi in his studio in Torino from 1918 to 1922.

Further, a comparison of the NMWA’s marble work *Monumento Sepolcrale per la Famiglia Durio*, with its respective modellos in Casale and a bronze example in Torino, and a comparison of the marble *Gli Amanti* with its respective modello, allowed me a chance to confirm the similarities and differences in expressive effect created by the different media involved. I was also able to study the finished work in Rome for the NMWA *Bozzetto per “il Sacrificio” del Monumento a Vittorio Emanuele II, Roma*.

The rediscovery of this group of sculptures by Bistolfi, which had remained almost unknown for three-quarters of a century, is a rare example of

a rediscovery of a group of European art works in Japan, both in terms of importance and scale. Further, these works help us reconsider the true nature of the Matsukata Collection, which has had its image formed largely from its seeming emphasis on the modern French art centering on the Impressionists. These works also stand as important witness to the history of cultural exchange between Italy and Japan.

Note: This summary provides a summation of the contents of two reports on this subject, the first published in the previous NMWA Journal No. 5, and the second half of the report published in this issue of the Journal.